

## 国際社会とナショナルアイデンティティ：対立から共存へ

### The Role of National Identity in Globalizing Society

#### ■分科会メンバー

杉本友里\*

飯倉江里衣

竹内智洋

庭野啓太

松下マエス

Ikuno Naka\*

Ian Cross

Deidra Denson

Anthony Taylor Luczak

Christina Ryu

(\*は分科会コーディネーター)



#### ■分科会概要

アイデンティティの違いはときに集団間の対立を引き起こす。第二次世界大戦中の米国では、日系米人への警戒の念や差別感情から強制収容が行われ、また近年中国の新疆ウイグル自治区では、漢族とウイグル族の対立から暴動が起きている。一方、カナダやオーストラリアでは多文化主義政策を採り、多様な言語や民族の調和を目指す国家形成が図られている。国境を越えてヒトやモノが盛んに行きかう現代において、どのようにナショナルアイデンティティが形成され、変化しているのか。そして、国民国家は今後どのようにして維持されていくのか。当分科会では、これらの問いに答えるべく、世界各国の事例をもとに、政治、文化、歴史認識など様々な側面からナショナルアイデンティティや国民国家について考察する。ナショナリズムや愛国主義に関する議論を通じて、多文化共生のために必要な政策、教育、メディアなどの在り方について検討する。

#### ■事前活動

公式のプログラム（春合宿など）を含め、計8回の事前活動を行った。一部の活動について以下で報告する。

- ・春合宿
- ・勉強会+ドキュメンタリー映画『ウリハッキョ』の上映会に参加
- ・東京朝鮮高級学校公開授業訪問
- ・防衛大学校研修
- ・ダライ・ラマ法王日本東アジア事務所訪問
- ・靖国神社、遊就館見学
- ・朝鮮大学校訪問
- ・直前合宿

また、これらの活動に加えて、各自がナショナルアイデンティティの問題について興味ある事例を選び、理解を深めるべくRTペーパーを作成した。

#### 1. 春合宿

春合宿では、分科会で取り扱うトピックや全体の方向性について話し合い、グローバル化する時代に生じるナショナルアイデンティティの問題を根幹にすえた上で、個々人が興味ある事例につい

て調べるという方針を決めた。また、国家の中での結合と排他が生じるのはなぜなのか、何をもって多民族の“共存”が果たされるのか、何がナショナルアイデンティティを形成するのか、などについても議論した。特に、国民がそのナショナルアイデンティティを形成する際に強く影響する主体について注目し、その主体として、私達はメディア、教育、政治に焦点をあてることにした。

グローバル化を概観で示すことは不可能に近く、現象として起きている全体的なグローバル化の末端で、具体的にどのようなアイデンティティの衝突が起きているのかに注目していくべきだと感じた。(庭野 啓太)

## 2. 勉強会+映画『ウリハッキョ』

日時：5月22日

参加者：飯倉、杉本、竹内、庭野、松下

『ナショナルアイデンティティ論の現在』（編：中谷猛／川上勉／高橋秀寿、晃洋書房、2003）を講読し、ナショナルアイデンティティの学術的な定義や、グローバリズムとナショナリズムとの関係などを再確認、共有した。しかし、抽象的な話ばかりでなかなかしっくりこない。そこで朝鮮学校についてのドキュメンタリー映画『ウリハッキョ』（朝鮮語で「私の学校」の意）の上映会に参加した。

私は在日朝鮮人のことをあまり知らなかったが、見慣れた授業風景と、日本の学校と同じように部活に励む様子に驚いた。しかし世間からの風当たりは厳しく、生徒数は減っている。それでも在日3世、4世は民族の誇りを絶やさず、朝鮮語を話し、チマチョゴリを着て、祖国の歌を歌う。彼らは消え行くアイデンティティを、差別と戦いながら必死に守っているように思えた。また、朝鮮学校だけが高校無sugi 償化から除外されているという事実も初めて知った。ナショナルアイデンティティの理論と実践について、今後の議論のベースを得た一日だった。(松下 マエス)

## 3. 防衛大学校研修

日時：6月11日

参加者：飯倉、杉本、竹内、庭野、松下



日々“日本人”であるという事を意識させられる防衛大生の生活は大変興味深く、彼らが思う“国家”や“日本人”の定義など聞きたい質問は山ほどあった。特に印象に残っているのは、ある防大生が指摘した、現在の日本人は「個人」を重視し過ぎるという事だ。曰く、もともとアメリカで考えられていた市民が持つべき、イギリス（＝他国）から束縛されない「自由」の概念が日本に伝わった際、それは一切の束縛が無い「自由」という風に間違っって捉えられてしまったという。この「自由と国民意識」については、本会議でも議論された。

ナショナルアイデンティティを語る上では、国民意識という目に見えない繋がりがどのように形成されるのかを知る必要がある。防衛大ではこの点をはっきりと見ることが出来、以後の活動に大いに役立った。(竹内 智洋)

## 4. ダライ・ラマ法王日本代表事務所訪問

日時：6月12日

参加者：飯倉、杉本、竹内、庭野、松下



## 第4章 分科会活動

チベット問題について、チベット亡命政府側の意見を学ぶべく、ダライ・ラマ法王日本・東アジア事務所の代表で自身も幼少期に亡命しているラクパ・ツォコさんに現在チベットで問題になっていることや、将来像について伺った。

「事実」を隠し続ける中国政府、寺院等がいつも監視されていて、言論の自由がない。環境汚染や貧富の差なども加わり、今でも毎年多くの人々が亡命しているようだ。ダライ・ラマ法王は、解決策として、独立はせず、外交・防衛以外は自分で管理する、「高度な自治区」という案を中国政府に提案している。なぜ命を危険に曝し、民族のために抗議運動をするのかと質問をした。「チベット文化は、世界最古の文化の一つである。仮に国がないとしても、私たちのアイデンティティや文化＝ダライ・ラマ法王、チベット仏教、基本的人権は護らなくてはならない。」という答えが印象的だった。中国政府側の主張と比べつつ、更にこの問題を考えていきたい。

(松下 マエス)

### 5. 靖国神社 遊就館

日時：6月13日

参加者：杉本、竹内、庭野、松下

靖国神社についてはA級戦犯合祀の問題が取りざたされることが多いが、今回は靖国神社の役割について神社の方にお話しを伺い、神社側の理念を理解することを目的とした。靖国神社の根本的な役割は、国家のために亡くなった方を絶えず慰霊することだ。この点について誤解が多いが、2点を挙げて靖国の正当性を説明していた。まず、近代国家の成立により、その国の犠牲になった方々を祀る仕組みができたのは靖国神社のみではなく、他国でも見られることであり、それ自体は問題ないということ。2点目に、戦前を振り返っても、国家による靖国神道への強制力はなかったこと。事実、靖国神社は日本人に一番なじみ深い“神道”を通して、犠牲者を国家で祀るという論理を持っており、遺族が個人的に追悼する際には各々の宗教による慰霊を認めていたということだ。

遊就館では日本の近代に関する資料が保守的な立

場から展示がされており、第二次世界大戦の部分だけをみても、沖縄研修で訪問したひめゆり祈念館とは全く異なる描写がされていた。どちらが正しいというわけではないが、歴史認識についてはその描かれ方がどのようなスタンスに基づいているかをしっかり把握した上で、自分の価値観と照らし合わせる事が重要だと思った。今回受けた説明や遊就館の展示が、本やメディアなどで自分が今まで知っていた靖国神社や歴史のイメージと異なっていたために、若干戸惑いを隠せず、メンバーとも靖国神社に対する色々な考えについて話し合った。さらに、靖国神社前を保守派の街宣車が活動していたり、失った戦友を讃えてか、軍服姿で木製銃を持って境内を行進し、参拝する人もいた。それぞれに違った価値観があり、自分はそれを干渉する権利もなく、そういった意見があるのだという意識を持つことが大事だと感じた。

(庭野 啓太)

### 6. 朝鮮大学校訪問

日時：6月17日

参加者：飯倉、竹内、松下

朝鮮学校唯一の大学教育相当機関である朝鮮大学校を訪れ、在日の歴史と高校無償化問題を中心とした講義を受け、校内見学と学生との座談会を行った。今回の訪問の中心となった任京河先生の講義では、在日と朝鮮学校の歴史、現在の在日が抱える問題、高校無償化問題の発端と現在までの進展状況について、戦後の朝鮮半島との関係の変化に伴う朝鮮学校の教育目的や内容の変化、在日にとって帰化が意味すること、そして高校無償化対象からの排除はどういった差別の問題なのか等についてお話を伺った。また、映像を通して過激な右翼団体「在特会」(「在日特権を許さない市民の会」)による京都朝鮮学校襲撃事件についても知り、差別の問題の深刻さを身近に感じた。座談会では日本のマスコミ報道をシビアに受け止める朝大生の姿が印象的であり、訪問後、知ろうとしないことや無関心であること、社会的な差別を黙認してしまうことは私達自身が差別に加担してしまうことではないかという話をした。

(飯倉 江里衣)



写真：朝鮮大学校にて

## ■本会議活動

IN、DC、NOの各サイトではテーマやメンバーの興味に沿ったフィールドトリップを行い、ベトナム系アメリカ人や在日朝鮮人についてのケーススタディ、ファイナルフォーラムに向けた議論を並行して進めた。一部のフィールドトリップについては、下記で報告する。SFサイトでは、最終発表の準備とともに、様々なナショナルアイデンティティに関する問題解決の一步となることを目的に、ビデオとブログを作成した。

### ●フィールドトリップ先一覧

- ・ Mona Bahn 教授によるレクチャー
- ・ American Council of Trustee and Alumni 訪問
- ・ 国連開発計画 ワシントン D.C. 事務所訪問
- ・ Arlington National Cemetery 訪問
- ・ Holocaust Museum 訪問
- ・ VAYLA(Vietnamese American Young Leaders Association) 代表とのディスカッション

本会議中のフィールドトリップ

#### 1. Mona Bahn 教授によるレクチャー

日時：7月28日

Bahn 教授による講義では、現在のナショナルアイデンティティが複雑になった要因としての Globalization や、Cosmopolitanism など、議論の基本となる概念や用語について説明していただいた。

また、ナショナルアイデンティティについて2つのモデルを議論した。一つは、アメリカ型

/"multi cultural model"とした多様なアイデンティティを認めるもの。もう一方は、フランス型/"over arch model"とした異なるアイデンティティを包括するような、より上位のアイデンティティを認識するものだ。

最後に、「文化は流動的であり、衝突しない。(個人のアイデンティティとして) 同時にアメリカ人であり日本人であることも可能だ。」と『文化の流動性』を強調していた。(松下 マエス)



#### 2. American Council of Trustees and Alumni

日時：8月4日

Bradley Project というアメリカの教育に関する企画について話を伺った。説明して頂いた Ms. Neal は、アメリカに年々増加する移民の流入により、アメリカ国民としてのアイデンティティが失われつつあると問題意識を持っており、これを解決すべくアメリカ史を大学の必修科目に取り入れようという運動をしている。私たちは常に、多様性を守る事を第一に考えた議論を進めていたため、彼女の考え方はそれと全く異なり、大変興味深かった。

『白人が勝ち取った自由』を意識させることで、アメリカに対する帰属意識を植え込むべきとした彼女に、私達は多くの疑問を投げかけた。「愛国心」は何故必要なのか。必要である場合、教育を通してでも植え込むべきものなのか。多様性を重視する中で、白人を「ヒーロー化」するべきなのか。ここでの議論を通して、分科会の最終目標について考えさせられた。(竹内 智洋)

## 第4章 分科会活動

### 3. 国連開発計画ワシントン D.C. 事務所

日時：8月5日



UNDP は End Poverty by 2015 というプロジェクトを掲げており、今回の訪問ではこのプロジェクトの説明と、それに対する質疑応答を行った。特に興味深かったのは、国連組織の説明の際に伺った、UNDP の計画が各国にどのようにして同意を得られ、実行されていくかという部分だ。説明して下さった職員の方は、UNDP の計画は国連加盟国によって署名されるが、国家横断的に計画を実施する際には、地域の Cultural Sensitivity を尊重していくべきだと述べていた。End Poverty by 2015 の stand up というプロモーションでは、国連というグローバルな立場から各国政府に対してスローガンを掲げるだけでなく、市民の草の根レベルでも実行していくプロセスを見て取れた。国家という枠組みを超えて活動する方のお話を伺い、Global Citizenship のイメージが少し明確になり、有意義な機会となった。(庭野 啓太)

### 4. Arlington National Cemetery

日時：8月6日

日本側参加者の要望で、アーリントン国立墓地を訪れた。渡米前に靖国神社を訪れていた為、それぞれの国においてどの様な扱いになのか興味があった。

真っ白な十字の墓石が延々と並ぶアーリントン墓地は我々にとって初めはただただ驚きだった。墓地では、笑顔で写真を撮っている人を数多く見かけ、観光バスの様なものも通っていた。靖国神社の場合は、第二次世界大戦や A 級裁判が連想さ

れ、ネガティブなイメージを抱かれがちなのに対し、ここは人々にとって自由の象徴のようだった。私達は、もし日本が戦争に勝っていたら靖国神社が日本人にとって自由の象徴となっていたのか、など議論した。(竹内 智洋)

### 5. VAYLA (Vietnamese American Young Leaders Association)

日時：8月12日



VAYLA は公益事業や文化の繁栄、積極的な社会変革を通じてベトナム系アメリカ人の権利獲得と若者の意見反映を目指す、ニューオーリンズのコミュニティベース型、青年主導型組織だ。この組織の創設者であり執行役員でもある Minh T. Nguyen さんから、組織の取り組みやニューオーリンズのベトナム系アメリカ人コミュニティの問題についてお話を伺った。また、訪問後に自主制作映画「New Orleans: A Village Called Versailles」の DVD を観賞してディスカッションを行った。

これらから、1975 年以降アメリカに移住したニューオーリンズのベトナム系アメリカ人第一世代と第二世代の若者達が、ハリケーン・カトリナをきっかけに一丸となって政治的な声を上げ、自分達の権利を訴えてきたということを知った。特に、彼らが「アメリカ人」としての権利を訴えている点は、アメリカの市民権を持ったマイノリティーと日本国籍を持たない日本のマイノリティーの問題の違いについて考える機会となった。

(飯倉 江里衣)

## ■ファイナルフォーラム

私達は、移民や少数民族に対する社会の問題意識を高め、適切な考え方を広めることを発表のゴールとした。今回はアメリカと日本の問題の事例として、特にベトナム系アメリカ人と在日朝鮮人に着目した。

まず、『知覚されるアイデンティティ』(Identity Perception) と『投影するアイデンティティ』(Identity Projection) という二つの概念を紹介したい。前者は、他人がみる個人のアイデンティティであり、後者は個人が自分で認識するアイデンティティだ。私達は、この2つのアイデンティティ間に「ずれ」が生まれたとき、様々な問題が起こると考えた。実際にこのモデルを各事例に当てはめると、ベトナム系アメリカ人も在日朝鮮人も、社会から見た彼らの姿と彼らの実情は全く異なっていた。それらが社会的な差別や不満につながったのである。

そして、「理解を促す」社会の実現が、この「ずれ」を解消し得る一つの答えだろう。それは、ひとりひとりが違いをタブー視せず、社会と個人が常に対話をし、お互いを理解しようと試みる中で実現する。また、実現への一歩として、ブログとビデオを制作した。これらを通じ、会議終了後も議論を継続し、広くこの問題を知ってもらいたい。  
Video URL: Identity Construction & Social Integration in the Globalizing World  
<http://www.youtube.com/watch?v=H9OQSJPJLkA>  
Blog URL: Identity and Integration  
<http://identityandintegration.blogspot.com/>

## ■分科会参加者の声

【飯倉 江里衣】

事前活動、本会議活動を通して、私がRTペーパーで取り上げた朝鮮学校の高校無償化問題に対して他のメンバーが興味を示してくれ、活動の中心に据えて皆で議論し考えることができたことが私にとっての大きな成果だと思っています。私のJASCへのイメージは多くの学生が日本、或いはアメリカへの関心を持ち、日米という枠組みの中

で議論を進めるというものでした。まさにそうしたイメージを崩すことのできる場、自ら土俵を作ることのできる場が私にとってのJASCであり、RTでした。

NID分科会はとことんぶつかり、衝突を繰り返しながら分かり合おうとするメンバーが多く、本当に様々な意見が出ました。自分達の日常の常識を超えてどこまで議論ができるか、考えることができるかということが一つの課題だったように思います。

一番苦労したのは、最終フォーラムで何をどのように発表するかを決める段階であり、結論部分で何を主張するのかということでした。私達RTの提言でもあり、私達がこのRTを通して学んだことは、まさに議論を止めず、考え続け、あらゆる人々の声を尊重し理解することでした。どこまでそれが本会議中に実践されたかは分かりませんが、本会議後も作成したブログ等を通して引き続き多くの人々と対話を続けていきたいと思っています。

【竹内 智洋】

第62回日米学生会議でNID分科会の一員となれてよかった。私は人生のちょうど半分ずつを日米で過ごしてきたが、その中で自分が経験した事全てを振り返り、活用させてくれた。国際化と共に広がる多様性。そして、多様性と共に世界各国で起こるアイデンティティの衝突。これらの問題を通し、現代の国家の意義や人々が持つ意識の欠点に気がつくことが出来た。また分科会を通して本当に貴重な経験をさせてもらった。一番印象に残っているのは、国立にある朝鮮大学に実際に行き、在校生と話をしたことである。メディアを通して色つきメガネで見てしまっていた私であったが、実際に同じ年の彼らと話す中で、例えある国が何をしようとその恨みを個人的関係に反映させてはならないと強く感じた。

また、会議の中で最も長い時間を共にしたのも分科会メンバーだった。分科会を通して出会った尊敬出来る仲間から教わった事は数えだしたらき

## 第4章 分科会活動

りが無い。事前活動を含めた3ヶ月ほどを共に一つのゴールを掲げ過ごした時間、期末や課題に苦戦しながらも常に互いに励ましあい困難を乗り越えた。自らに課せられた仕事を淡々と行うメンバーから常に私は身を引き締め、頑張ろうと思えた。

分科会を通して私は知識面のみならず人間として少し成長できたのではないと思う。まったく個性の違う10人のメンバーが何故ここまでうまく出来たのか私は未だに不思議だが、分科会で得た経験を今後に生かし、分科会で得た絆な一生守っていききたいと思う。

### 【庭野 啓太】

第62回日米学生会議のテーマが「衝突と共鳴」、ということから、分科会でもためらわずに自分の思いをぶつけることを個人的な目標に抱えていたが、それが十分にできたかという、全くそうではない。特に第3サイトのニューオーリンズでは自分の体調があまりすぐれなかったこともあり、議論に妥協を重ね、自分の頭でしっかり考えることもなく、その場の雰囲気流されてしまうようなことが何度もあった。そうした中、他のメンバーが目前の問題から逃げずに議論を重ね、ひたむきに前に進もうとしている姿を見て、申し訳なくも思った。実際、ファイナルフォーラムの後に皆で集まって開いた分科会のリフレクションの時間には、後悔の念がよどみ出てくるような思いだった。

しかし、最高の仲間巡りに巡り会えたことに感謝せずにはいられない。こんな自分でも1ヶ月間支えてくれ、ともに笑い、たわいもないことで議論があった仲間がいたということは本当にありがたい。「自分に自信を失うことは、自分を信頼してくれる人に失礼だ」とジャバデリの一人が言っていたが、彼らは確実に自分を信頼してくれる人たちだった。会議も終わり、分科会も解散してしまったが、彼らとの関係がこれからもずっと続くことを思うと、本当にこの会議に参加して良かったし、これからも自分なりにがんばっていこうと心から思う。

### 【松下 マエス】

なぜ日米学生会議に応募したのか?とよく聞かれる。アメリカに行ったことがないから、という理由もあるが、やはり一番は興味のあるNID分科会があったからだ。「私は何人なのか」というのは以前から、そして今でも個人的な葛藤課題である。パーソナルな事を10人で議論する勇気をくれたという意味でも、まず分科会リーダーの友里とIkunoにExcitingなテーマを選んでくれたお礼を述べたい。ありがとう!

メンバーになってから、ただアメリカに行って楽しむプログラムではないと知った。グライ・ラマ法王とお会いし、朝鮮大学校を見学したり、アメリカでベトナム村に行ったりなど、NIDでなかったら絶対できなかったことや、興味がある分野が増えた。メンバーと議論することで、もっと考えさせられた。そんな自由でChallengingな雰囲気共有してくれたNIDメンバーのみんな、ありがとう!

世界にある様々な問題を、学生がすぐに解決をすることは不可能だ。しかし、できないと諦めていては何も変わらないままである。何かアクションを起こし、前進することの意義を教えてください、分科会活動でお会いした様々な分野の活動家の皆様、ありがとうございました。

来年は歴史教育やマイノリティーなど、NIDに関連したテーマも多いので、これからはぜひOGとして日米学生会議に関わっていきたいと思う。

### ■分科会コーディネーター総括

「ナショナルアイデンティティ」は、現代や、そこに生きる私たちを捉える一つの視点として、とても興味深く、そこから示唆されるものは膨大だった。育った環境、教育、メディアなど様々な要素から、無意識的/意識的に他者への描写ができあがり、それは時に彼らへの暴力として働く。しかし、在日朝鮮人、チベット人、ベトナム系アメリカ人、様々な場所に生きる様々な人々に出会い、対話する度に、他者について絶対的に正しい描写などあり得ないと痛感した。また、相対的だからこそ多

様に存在する描写を許容する「寛容さ」の重要性にも改めて気づかされた。そして、この描写は、変わり続ける社会と、自らの経験を通してさらに変化するものであり、私たちには今後より一層の想像力が求められるだろう。

出身も人生経験も全く異なる10人による議論は尽きることなく、まさに十人十色の意見が飛び交った。激しい議論の中で、戸惑いながらも、最後まで真摯に向き合い、気遣い合い続けたメンバーには本当に頭が下がる。「多様性」とそこから派生する「衝突と共鳴」は、私たちにとって、テーマであり、手段であり、ゴールであり、私たち自身だったように思う。また、作成したビデオとブログは、

一人でも多くの方に見ていただきたい。これらが少しでも多くの「衝突と共鳴」のきっかけとなることを願う。

1ヶ月間、あるいは1年間、実行委員として奮い立たせてくれたメンバーには感謝してもしきれない。最高のパートナー、最高のメンバーに恵まれ、誰が欠けても成り立たなかった。この分科会の一員であることを心から嬉しく思う。

最後に、事前活動、本会議中に当分科会の活動にご理解、ご協力いただき、大変有意義な機会を与えていただいた全ての皆様に、この場を借りて心より御礼申し上げます。

(杉本 友里)